

## 長崎と尺八 — 二つの謎

松林 静風

長崎と尺八を考えるうえで二つの謎が残されている。一つは「島原城の一節切」尺八の謎、もう一つは長崎松寿軒で尺八琴古流の流祖黒沢琴古に古伝三曲や鹿の遠音を伝授したとされる「林翁一計」の謎である。

平成十六年の三月二十日付の「ながさきの空」に私は「島原城に展示してあった一節切」と題して起稿させていただいた。そして一ヶ月後の四月二十九日、全国から尺八古管研究の第一人者の方々を招き、島原に行き実物を見ていただき、一節切について討議し演奏会を催した。来られた方は東京から虚無僧研究会会長で江戸時代の虚無僧寺関東総本山鈴法寺ゆかりの寺、法身寺住職小菅大徹師、大阪からは尺八古管研究の大阪芸術大学教授志村哲師、千葉からはNHKテレビで一節切を吹く雪舟禅師役を演じるなど一節切の奏者として指導の中心的役割を果たしておられる相良保之師、小田原からは駿府、小田原周辺の尺八史研究家の牧嶋正春師、柳川からは尺八古管研究会を主宰する多福寺住職竹井徹師、熊本からは谷派虚鐸の象徴三尺大長管を携えてインド行脚をし、全国にその名が知られる葉



筆者持つ尺八

王寺住職白土虚皓師、島原からは郷土史家、林銑吉先生の子息林新次師、ほか福岡、宮崎から総員十五名の識者が集い、島原一節切の調査を誓いあった。それから五年が経過した。

以降の建立であるから元祖虚竹ではないが、水上氏は尺八は長崎から伝来したということ叫びたかったのであろう。

水上氏自身は若い頃、相国寺で修業した方であり、相国寺は景徐周麟ゆかりの寺である。充分に尺八の歴史を知り自身も中国に向き確証を掴んだうえで、初代は一休禅師や朗庵主一路禅師の近くに虚竹を置き、後世は長崎の崇福寺内に虚竹を置き、隠元禅師と共に長崎に持ち込まれた明楽の南音洞簫が、以後の日本の尺八を一節切から根付きの多節尺八に一変させたことを考えれば理解できる。

もう一つ考えられる事は、鈴法寺と島原城とのかかわりである。唐人が果たして「古伝三曲」や「鹿の遠音」を伝授したのだろうか。明楽の中にはこのような曲名を持つ曲は見当らない。とすれば日本人。松平初代島原城主松平忠房公の祖父松平家忠は「家忠日記」で知られるように有名な文人であり、家忠日記の中には多くの茶会、連歌会、能会の記述があり一節切演奏の機会も多かったと考えている。忠房公は武蔵の忍城の徳川初代城主となり青梅鈴法寺の建立にかかわり、島原城の一節切の松平重定(後年牧性)も忍城に家忠と共に入城している。さらに家忠後任の忍城城主は、家康の四男忠吉を挟んで知恵伊豆・松平伊豆守信綱である。信綱は「島原の乱」鎮圧の直後長崎に来て、鎖国を進め、オランダ商館を平戸より出島に移し、虚無僧寺玖埼寺(のちの松寿軒)を建立した人であり、そのような環境から松寿軒を訪れる鈴法寺関係の僧も多かったであろう。そうであれば古伝三曲を伝授したことへの懸念は薄らぐが庵主となれば極めて限られて来る。

琴古は長崎に来て一計士に七曲を伝授され、のちに江戸で尺八と琴との合奏を普及させた言わば日本の三曲合奏の創始者といえる。又長崎から関西に出て、のちに都山流を生んだ近藤宗悦も長崎では清楽を嗜み、太平簫の達人だった。当時の清楽のリーダーは林得建、やはり林氏、果して林翁一計という人物は唐人だったであろうか、和人だったのか謎は残されている。

島原城の一節切が極め書き通り江戸時代以前の法橋宜竹の管であれば素晴らしい発見であり、又松寿軒の一計士が水上勉氏が夢見たように唐人であれば、長崎に住む尺八研究者として誇らしい発見である。さらに調査を深めたい。

(古典尺八竹風会会長)

当時はまだ疑心暗鬼だった点多かったがその後多くの専門家の協力があり、多くの情報が寄せられ、現在では「島原城の一節切」は名人法橋宜竹の作であることに異論を唱える者は居なくなった。

ただ問題なのは、天正十年(一五八二)に同尺八を手に入れたという極め書の裏付けである。江戸時代の百科辞典「萬宝全書」に「宜竹は笛の元祖といへり」と記載されている。宜竹という名の笛師が何代か続き、初代は元祖と呼ばれるに房わしい方であったのであろう。然し当時の一節切関係資料によれば、蘆庵―宗佐―高瀬備前守―教院―安田城長―大森宗勲―指田一音と記され、明暦元年(一六五五)に法橋に徐せられた宜竹を元祖としているのではなく、むしろ蘆庵や宗佐と関係のあった笛師だったと私は推測している。

一休禅師の時代に号を宜竹と称した僧がいた。相国寺慈照院塔主の景徐周麟で、其の師は横川景三で一休禅師や朗庵主一路禅師と親交があった。朗庵と蘆庵は同じではなからうか?。又一休の門下、連歌の飯尾宗祇、その門下が宗佐で宗佐老人と呼ばれ、一節切の祖と呼ばれてきた。

景徐周麟の活動拠点が慈照院の宜竹軒で、元祖宜竹はこうした環境の中で宜竹銘を許された僧であったと推測される。宜竹本人であったかも知れないし、宜竹の別号が「江左」であったことから宗左老人だったかも知れない。

### もう一つの謎、松寿軒一計の事

邦楽ジャーナル誌二〇〇〇―四月号に一計の尺八と思われる尺八が紹介されている。そこには「林翁一計庵主、元文庚申天(一七四〇)行年六十二歳」と記されている。庵主とあるが松寿軒歴代庵主の中には一計の名は出ていない。他庵から来られた方であろう。

水上勉氏は「虚竹の笛」という本の中で「尺八の祖虚竹は長崎崇福寺の総門をくぐって左にいた」と空想している。もちろん崇福寺は江戸時代

### 風信

○五月二日は、三月四日の「立春の日」より数えて八十八日になるので此の日を「八十八夜」と言い、「夏も近づくと八十八夜 野にも山にも若葉がしげる」と唄う。そして其の夏の始まりを旧暦では「立夏」という。今年の立夏は五月六日であり、まさしく歌のとおりである。

○また、八十八夜に摘まれた「茶の葉」は縁起のよい物として嬉ぶ。其の意は、八十八の八の文字は中国の古書に「大いに分かれるの貌」とあり、我が国で之を「未ひろがり次ぎ次ぎと榮えゆく文字也」と解し、更に、米の字を分解すれば「八十八」となり「米寿也」とする。故に「八十八夜のお茶」は長寿の源として嬉ぶと言う。

○更に旧暦法によると五月は「更衣」の時であると次のように記してある。武家・民間ともに五月五日より八月末まで帷子(かたびら) 九月一日より裕(あわせ)

然し現在の五月五日では旧暦の四月一日で少し寒いので、長崎地方では明治初年「長崎くんち」は旧暦の九月七・八・九日であったのを十月七・八・九日と変更したのに合わせ、六月一日の小屋入りの日を更衣の日と定め、当日出仕の各町世話人の衣装は縹絞付、夏袴の着用と記してある。

○次に五月五日は男の節句とある。この行事も其の起源は中国の「端午節」である。中国の古書に「端は始也、五は午也、五月五日は午重る也、午は長也大也、物皆長大となる」又一説として「五月端の午の日は悪日也 此日を忌み蘭草に浴し邪気を拂う」としている。この悪日となった故事として「屈原・汨羅に身を投じた日」との伝があり、更にこの説話は粽(ちま子)や競竜の起源となったとの伝承もある。

○我が国に五月五日の端午節の行事が中国より宮中の行事として伝えられ記録としては推古天皇十九年五月五日(六一)が最初であるという。

以来・延喜式にも「五月五日宮中に邪気拂いのため菖蒲・艾を献ず」とあり鎌倉時代になると兜花の菖蒲を贈るとある。鯉のぼりが登場してくるのは江戸時代からである。

○五月は以上のように若葉萌え出で邪気を拂う季節とされている。長崎の街にも今月より新しい市長さん、各議員も進出されたので新しい長崎の街づくりを発想して戴き、長崎を訪ねてこられる人を心あたたくお迎えし、又それに加え新しい構想をもった生産工業の面でも大いに発展して下さる事を祈念している。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一―一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所 二F

